

『豊後国莊園公領史料集成』八(下)

末 広 利 人

渡辺澄夫編・別府大学付属図書館刊行の「豊後国莊園公領史料集成」八(下)が出版された。誠に意義深いことである。

莊園史の研究は古代中世史研究の最有力領域の一つであり、これまでに有名莊園ごとの史料集は、全国的にも数多く刊行されている。しかし、本書で十二冊目を数えるこのシリーズは、豊後国全域にわたって、有名無名を問わず、郡別莊園別に、立券されたすべての莊園について史料を網羅していること、研究史としてはこれからされる国衙領域(公領)についても莊園資料同様の密度で史料が集められていることにこれまでにない特色がある。本書をもって、豊後国の莊園公領の史料本文は一応の完結を見た。県下の莊園公領の研究と地域史研究は、本集成により多大の便宜を与えられたのである。

江戸期の「豊後国志」や明治初期の「大分県史料」、昭和二十七年以来の「大分県史料」の編さんにも匹敵する大事業であろう。

しかも、岡藩や大分県、大分県教委といった公の組織や共同作業に依存することなく、十数年の歳月を要しつつも、一大学と一個人によって達成されたことは特筆すべきである。今後長年にわたって、多くの学徒が、県民が、この渡辺氏の偉業に多大の恩恵を被ることとなるろう。深甚の経緯と謝意を表する次第である。

さて本書は、口絵カラー写真十一点のほか、日田郡諸莊の史料と既刊十一巻分の補遺史料から成る。

日田郡諸莊史料は、日田莊関係四百二十点、宇佐宮領五カ所付得善名関係九点、大肥莊関係七十二点、津江山関係八十二点の計五百八十三点で四百頁余をしめ、付録として各莊史料の末尾に大字小字一覧表が添えられている。

史料は律令期から慶長年間に及んでおり、碩学渡辺氏が、古文書はもちろんあらゆる古記録・編著・系図・金石文などから

渉猟されたものである。多くの文書について原本校合がなされていることも心強い。

日田郡五郷から四荘の成立とその後の推移、天領成立の前史にいたる史料が編年で収録されている。

例えば、日田荘が皇室御領金剛心院領であることを確定づけた日田郡司職次第はもちろんであるが、大蔵永季の相模伝説にかかわる公家日記にも目が注がれている。また、三十三頁にわたる巻末の解説は詳細であり、そのまま見事な日田郡の古代中世史である。

補遺史料は、郡別には分類し難い豊後一國に関する広域史料の四十八点と各巻荘郷別史料の四百九十九点の計五百四十七点、三百七十頁余に及ぶ。合計八百二十頁の大冊であるが、巻末には五万分の一の地形図がつけられ、当該荘園の所在地および関係地名が確認できる。

編者の渡辺先生はすでに齡八十代の半ばに達したが、なおきわめて壮健であり、このあと「件名・人名・地名」索引の刊行を予定し、さらに研究編を加えたいと意欲を燃やしている。とうてい、われわれ凡夫のまねることのできないエネルギーと精緻さに、ただ驚くばかりである。

筆者は日田出身の故をもって日田諸荘史料を中心とする本書紹介の榮に浴したが、先生については三十数年前の鮮明な思い出がある。のちに東大史料編さん所長になられた竹内理三先生が、十年間の九大勤務を終え、東大に榮転される時のことである。国史専攻の学生と院生を集めて、自分は縁あって中央に去るが、学問は地方にいてもできる、頑張ってほしい、大分大学の渡辺先生を見よと話されたのである。

当時壮年の渡辺先生は大著「畿内庄園の基礎構造」を世に問い、学界に一大衝撃を与えていた。以来先生は、一貫して大分の地を離れることなく、大分をフィールドとして高い研究成果をあげ、史料の収集と編集に専心、後進を育成し続けた。

「豊後国荘園公領史料集成」は、そんな先生の畢生の大作である。この上は索引編と研究編が無事全うされることを祈ってやまない。そしてさらに、豊前国シリーズにも取り組んでほしいと思う。

(前大分県教委文化課長・現県立三重高校長)

〔平成七年十一月二十三日付大分合同新聞より。原題「『豊後国荘園公領史料集成』八(下)の刊行を祝う」〕